

学位論文内容の要旨

	直井 文子【論文博士】 【比較文化学専攻 昭和63年度生】 (平成3年3月31日 単位修得退学)	要 旨
学位申請者		<p>本論文は、齋藤拙堂、頼山陽、頼春水、頼杏坪の四人を取り上げ、江戸後期の文人の漢詩文を考察対象とする。</p> <p>拙堂については、中国の中唐の文人韓愈に対する敬仰の念と『拙堂文話』の主張に通じるところのあることを指摘し、さらには紀行文の特質、『拙堂文話』の改作の問題とその背景、拙堂の文業における漢文小説『海外異伝』の意味、さらには「狂」字の用法などを論じる。</p> <p>山陽については、歴史上の女性を詠じた「十二媛絶句」を通して彼の女性観を分析し、また広島や京都における詩社活動に着目してその実態を明らかにする。</p> <p>互いに尊敬の念をいだきあった拙堂と山陽については、両者の墓碑銘の書き方や、「狂」字の用法を比較対照することによって、文人としての特質や生き方との関わりについても言及する。</p> <p>山陽の父である春水については、従来あまり取り上げられることのなかった文献『与楽叢書』を渉猟し、その詩にみえる孤独の様相を指摘する。学問の人としての春水の新しい側面に光を当てた意義ある考察である。</p> <p>山陽の叔父である杏坪については、詩と和歌とを併記したその著作『十旬花月帖』を取り上げ、ふたつの文学形式が合わさることによって形作られる独特の文学世界を分析する。</p> <p>論文全体を通しては、四人はいかなる「文人」であり、いかなる「儒者」であったか、また「狂」という視点を通して見たとき、それぞれの表現者としての特質はいかなるものであったかを論じて、彼らに共通するもの、あるいはそれぞれの個性として浮かび上がるものを指摘している。</p>
論文題目	江戸後期日本漢文学研究 — 齋藤拙堂・頼山陽・頼春水・頼杏坪を中心に —	
審査委員	<p>(主査) 教授 和田 英信</p> <p>教授 伊藤 美重子</p> <p>教授 宮尾 正樹</p> <p>准教授 伊藤 さとみ</p> <p>教授 神田 由築</p>	